

令和2年度 地域連携講座

子どもたちの健やかな成長を願って



川越市立福原小学校教諭
山崎るみ

話の流れ

- 1 自己紹介
- 2 大切なことを教えてくれた子どもたち
- 3 自尊感情を高めるために
- 4 集団をどう育てるか
- 5 大切にしたいこと
- 6 まとめ

1 自己紹介

小学校

通常学級

特別支援学級

自閉症・情緒障害学級

知的障害学級

その他

校内裁量による個別指導教室

2 大切なことを教えてくれた子どもたち

- ・ 漢字が覚えられないJさん
- ・ 給食を食べずに廊下を歩いていたIさん
- ・ 暴力を止められなかったCさん
- ・ もう一度勉強を教えてと言ったLさん
- ・ 「ほら、見て。自分はああしてたね。」と言ったUさん
- ・ ばかだからここに来たんでしょと言ったMさん
- ・ 生活アンケートに手が震えてしまったKさん

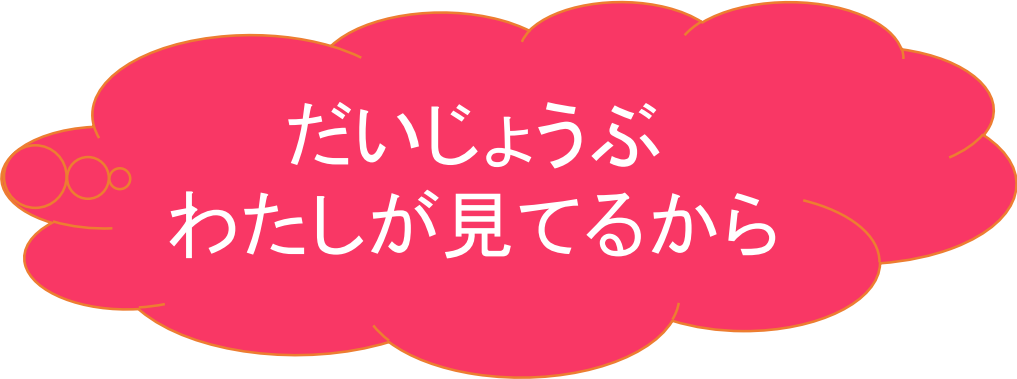
3 自尊感情を高めるために

- (1) つながるという安心感
「大丈夫。私が見てるよ」
- (2) 宮口幸治著「ケーキの切れない子ども達」から学ぶ
- (3) 適切な支援

3 自尊感情を高めるために

(1) つながるという安心感

- ① 個別指導をする中で感じたこと
- ② 個別指導を受けていた子どもたちへのアンケート
- ③ セキュアベース
- ④ 和歌山大学
米澤好史先生の講演より
- ⑤ アサーティブなやりとりの中での相手と自分の理解



だいじょうぶ
わたしが見てるから

2 自尊感情を高めるために

(2) 宮口幸治著「ケーキの切れない非行少年たち」から学ぶ

これまで社会で失敗し続けて自信を無くしてきた彼らが、集団生活のさまざまな人との関係性の中で、

「自己への気づきがあること」

そして、さまざまな体験や教育を受ける中で

「自己評価が向上すること」

の二つなのです。

3 自尊感情を高めるために

(3) 適切な支援

できるという自信
大切にされているという思い

特定な子どもへの
支援

三次支援

- ・外部機関との連携
- ・専門的な支援

一部の子どもへの
支援

二次支援

- ・**予防的援助**
アセスメントに基づいた個別支援など

すべての子ども
への支援

一次支援

- ・**わかりやすい授業**
視覚的な支援
ユニバーサルデザインの工夫

こころとこころの温かいつながり

4 集団をどう育てるか

(1) バンデューラの研究
ボボ人形実験から学ぶ

(2) 姜尚中著「悩む力」より

(3) 水島広子著「自己肯定感持っていますか？」より

(4) 澤崎俊之先生「アサーショントレーニング」より

5 大切にしたいこと

エリクソンの発達段階

発達段階	心理的課題	危機
乳児期(出生から1年未満)	信頼	不信
幼児期初期(1歳から3歳)	自律性	恥と疑惑
幼児期後期(3歳から6歳)	積極性	罪悪感
学童期(6歳から13歳頃)	勤勉性	劣等感
青年期(13歳から22歳頃)	自我同一性	やくわりの混乱
成人期(22歳から40歳頃)	親密性	孤立
壮年期(40歳から65歳頃)	世代性	停滞
老年期(65歳以上)	統合性	絶望

乳児期(出生から1年未満)

母親や母親的な人に出会うことで自分や他者を十分に信頼できるようになる。親の不在や不和、」乳児への

拒否、虐待、放任などは乳児の精神機能が正常に発達せず、情緒や行動の問題が発生する。

幼児期初期(1歳から3歳)

言語の急速な発達の伴い、自ら行動できるようになる時期。自分という主体晴雨や自主性の基盤となる。うまくいかないと葛藤が起こる。

幼児期後期(3歳から6歳)

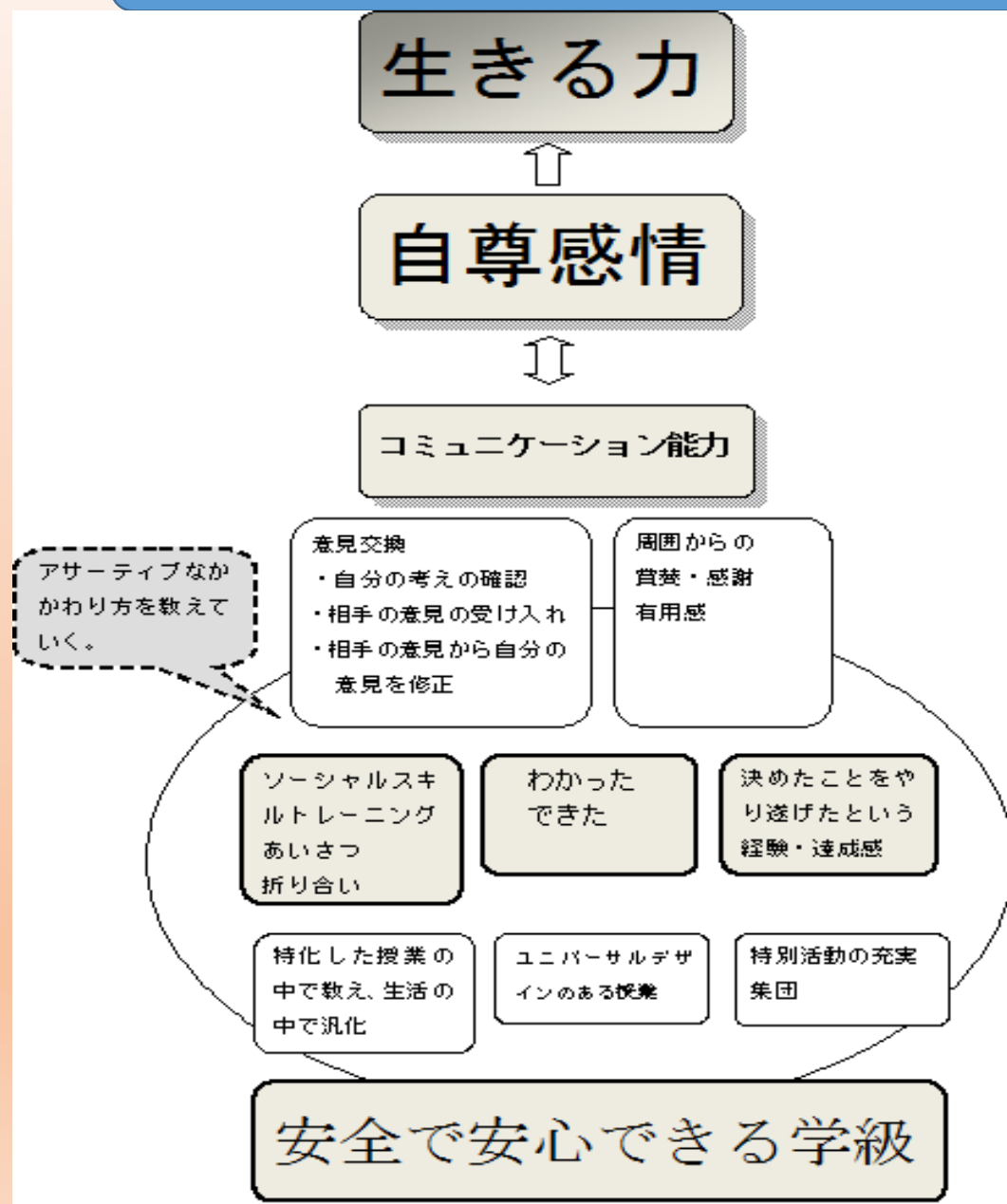
自律性が育まれ、自分で考え、行動するようになる時期である。(積極性)親の助言や「ごっこ遊び」を通じて社会性や規範を身に着けていく。その間に親からの注意・叱責を受けて不安を引き起こす。(罪悪感)

学童期

他者とのかかわりの中で、自身の得意・不得意を自覚し積極性を生かしながら目的を達成していく。(勤勉性)一方、失敗や叱責、勝負への敗北を経験する。(劣等感)

順天堂大学 小森大輝氏

6 まとめ



子どもへの愛と安心感

私があなたを見てるから。あなたはあ
なたで大丈夫だから

「わかった・できた」の自信

スモールステップやわかりやすさの
工夫 やり遂げた喜び

相互承認と自己理解

自分の苦手さもまるごと受け入れ
ながら、他者から認められることで
自分の良さやがわかっていく。

6 まとめ

私はこれまで、たくさん子どもたちと接してきました。その中で感じてきたことは、たくさん子どもたちが不安を抱えながら、そしてその気持ちをうまく伝えられずに過ごしているということです。小さな胸で「自分は変なのではないか」とさえ感じ、どうしようもない不安を抱えていました。「なんでみんなと同じように覚えられないんだろう。」「どうして失敗ばかりなんだろう。」「どうして、いつも、いつも叱られてしまうんだろう。」「・・・と自分を責めながら、何とか頑張っていました。

「自己肯定感が低い。」とよく言いますが、子どもにそう思わせてしまうには原因があったわけで・・・先ほどご紹介した水島広子先生の著書には「人間は本来頑張る生き物だ」という言葉があります。その言葉を読んでからこの言葉は私のバイブルとなりました。できないには理由がある。頑張れないのにはわけがある。と以前より強く思うようになりました。「なぜ・・・」を考えることはアセスメントにも通じます。覚えられないのは本人の努力不足ではなく、なぜ努力できないのか、なぜ覚える気持ちが起こらないのか、なぜ覚えられないのか、を追求し支援していくことが大切なのだと思います。そして自己肯定感をあげるのにはどうしたらよいのかを吟味しながら支援していくことが大切です。以前特別支援学級で担任した自閉症のN君は自立活動で一緒に作ったルールブックを休み時間によく見ていました。「どうしてそんなによく見ているのか。」と尋ねると「これを見て失敗しないようにしたいから。」と答えました。その時とてもどきっとさせられました。

子どもの頑張りたいという心に触れた思いでした。

子どもがどう困っているのか、何を求めているのか常に問いながらこれからも過ごしていきたいと思います。

おわりに

U君との思い出を紹介し、私の話を
終わりたいと思います。



ご清聴ありがとうございました